

保育者は折り紙遊びをどのように指導しているか

——保育者へのアンケート調査から——

上 田 淑 子・梶 愛 梨*

How Do Teachers teach Origami Play : Questionnaire Survey to Teachers of Pre- and Nursery Schools

UEDA Yoshiko and KAJI Airi

Abstract : Origami (=paper folding), which is the most common traditional play in Japanese pre- and nursery schools, promotes children's physical and mental developments. However, to teach origami successfully in a class is thought difficult because skills to play origami greatly differ among children. We implanted a questionnaire survey with 14 teachers of 3 pre- and nursery schools to know how origami is taught in a class. Eight of them use origami as an educational material in their classes once a month or more, usually for decoration of seasonal events, but the others of the same preschool do it only in free play time. Their answers revealed that they have taught origami using slow, repeated, easy explanations and demonstrating how to fold it. For children who cannot fold it successfully, most of the answers are to sit next to the child and fold it together. One teacher answered that for easier teaching I made children who are difficult to play origami sit the same table. This idea is considered very effective to reduce difficulty in teaching origami in a class.

Key Words : Origami (paper folding), traditional play, preschool teacher, questionnaire survey

要旨 : 折り紙遊びは保育に最もよく使われる伝承遊びであり、子どもの身体的・精神的発達に意義がある遊びである。しかし、折り紙遊びは子どもの技量差が大きいため、クラス全体をうまく指導するのが難しいとされている。本研究では、幼稚園・保育所で折り紙遊びをどのように指導しているかを知るために、2幼稚園、1保育所の保育者14名にアンケート調査を行った。8名が季節行事の飾りなどで月1回以上クラス全体での折り紙を行っていたが、1つの幼稚園の7名は自由遊びにしか行っていなかった。保育者は折り方をゆっくり、分かりやすく、繰り返して、手本を示して説明することを心がけ、出来ない子どもには傍で一緒に折るという回答がほとんどであった。子どもの技量差については、ある保育者は、苦手な子どもを同じテーブルに集めて指導しやすくしていた。この方法はクラス内での折り紙遊び指導の難しさを減らす上で非常に有効であると考えられる。

キーワード : 折り紙, 伝承遊び, 保育者, アンケート調査

*太秦幼稚園

I. はじめに

折り紙遊びは古くから保育に取り入れられてきた日本の伝承遊びの 1 つであり、子どもの発達にとって多様な意義があると考えられている。集中力、理解力、忍耐力、手先の器用さなどの能力的な発達の意義とともに精神的発達の意義も大きい。たとえば、岩瀬・中山 (2010) は保育における折り紙の効用として、制作する本能的楽しみ、作品のイメージを膨らませて主体的に取り組む楽しみ、折り方を友達同士が教え合うコミュニケーションの場づくり、折れるようになると「もっと上手に折りたい」という意欲が湧いてくる、などをあげている。福井 (2003) によれば、幼児のいる家庭での折り紙の常備率は 94.7% で、98.2% の母親が親子で一緒に折り紙で遊んだことがある。穂丸ら (2007) が全国の幼稚園・保育所 651 ヶ所に対して行なったアンケート調査でもほぼすべて (99.9%) の園が折り紙遊びを実施しており、61 種の伝承遊びの中で最も高い実施率であった。これらのことから、折り紙遊びは多様な意義があるだけでなく、私たちに最も馴染みの深い伝承遊びといえる。

しかし、子どもの発達における折り紙遊びの意義が指摘されていながらも、保育と折り紙遊びとの関わりについての研究はそれほど多くはない。これまでの研究では、保育教材としての折り紙遊びの意義や歴史研究 (福井 2003, 大森 2011, 五十嵐 2012)、折り紙に対する子どもの嗜好性の調査 (田中・後藤 1989)、折り紙遊びを通じた保育者の能力と子どもの発達の関係についての観察調査 (長根 2006)、保育における折り紙遊びの実態と保育者の意識調査 (岩瀬・中山 2010)、保育実習時の折り紙遊びについて聞いた学生へのアンケート調査 (梨本 2015) などが行われている。

岩瀬・中山 (2010) は折り紙遊びの指導の難しさに

ついて、「子どもたちの間で理解力にそれぞれ差があるので、早い子はどんどん先に進んでしまい、終わるのも早くなるので、どうしても飽きがきて騒いしてしまうなど時間をもてあそぶようになるが、折り紙が苦手な子は教師の手助けがどうしても必要になり、時間もかかるので、クラス全体を上手にコントロールすることが難しい」と説明している。実際、長根 (2006) が行なった折り紙遊びの指導の観察調査でも、一人の出来ない子どもの指導に終始して全体を把握しきれていない例が紹介されている。折り紙遊びはこうした著しい子どもの技量差による指導の難しさがあるため、教材としての価値を認識しながらも保育に取り入れることを躊躇する保育者もいるであろう。そのため、折り紙遊びの意義を保育の中で活かしていくためには、その指導の難しさを解消していく必要がある。

折り紙遊びの指導について、保育現場における実態、とくに技量差が著しい折り紙遊びの指導の難しさに保育者がどのように対応しているかについての研究はまだない。また、保育者自身が保育教材としての折り紙をどのように評価しているかについての意識調査もない。そこで、本研究では、とくに折り紙遊びの指導の難しさの主要因になっている折り紙が上手く出来ない子どもに対する適切な指導や援助の方法を探ることを目的に、折り紙遊びを行う子どもの様子、保育者の指導の方法、および保育教材としての折り紙に対する意識について保育者に記述式アンケート調査を行った。

II. 方 法

折り紙遊びに関する調査は、H 県内の A 幼稚園 3 名、B 保育所 4 名、C 幼稚園 7 名、の計 14 名を対象に 2014 年 7 月から 9 月の間に行なった。調査は、研究目的を了解いただいた上でアンケート用紙を渡し、後日回収する方法で行なった。アンケートは、回答者

表 1 アンケートの 8 項目の質問内容 (元文のまま)

-
- ①「折り紙遊び」をしている回数は月におおよそどのくらいありますか。
(クラス全体 回くらい、自由に遊んでいる時 回くらい)
 - ②保育の中で、どのような場面で「折り紙遊び」をしていますか。(例：クラス全体で壁面構成を行う時、クラス全体で製作を行う時、自由に折り紙を折って遊んでいる時、など)
 - ③保育の中で「折り紙遊び」をしている際の様々な子どもの姿についてお聞かせください。(例：折るのが上手な子どもが多い、うまく折れない子どもが多い、友達に折り方を教えている、折り方がわからなくて折ろうとしない、など)
 - ④「折り紙遊び」の時の子どもへの援助の具体的な方法として行っていることはどのようなことですか。
 - ⑤④の中でも特に留意していることはどのようなことですか。
 - ⑥「折り紙」がうまく折れない子どもに対しては、どういうことに配慮して援助していますか。
 - ⑦⑥のうまく折れない子どもに対して援助した後の子どもの姿について、援助前とどのような変化がみられましたか。
 - ⑧『保育者として保育に「折り紙遊び」を取り入れることについてのお考え』をお書きください。
-

のプロフィール（年代、保育者経験年数、担任クラスの年齢）に加えて、折り紙遊びに関する以下①～⑧の項目の質問を設けた（表1）。なお、本研究では折り紙が出来ない子どもに教えるという意味から「指導」という言葉を用いているが、アンケートでは質問の意味を折り方の説明方法だけに誤解されないように「援助」という言葉を用いた。

質問①については数値を記入する回答欄を設けたが、②以降の質問の回答は罫線のない約14cm×4cmの回答欄を設けて自由記述とした。保育者の援助の方法について聞いた質問④～⑥が本研究の主な目的な項目である。

回答者のプロフィールの内訳はすべて女性で、年齢は20歳代10名、30歳代1名、40歳代2名、50歳代1名で、経験年数は1年が1名、5年から9年が9名、10年以上4名であった。保育者の年齢と保育経験年数はほぼ相関した。担当クラスについては、3歳児4名（2歳児兼任1名を含む）、4歳児3名、5歳児6名、担当なし1名であった。

Ⅲ. 結果と考察

保育者の年代や保育経験年数、担任クラスの年齢によって回答の内容に目立った違いは認められなかったため、結果はそれらを区別せずにまとめる。以下の斜体部分はアンケート回答の記述をそのまま引用したことを示す。

質問①：折り紙遊びの頻度

クラス全体で行う折り紙遊びは保育指導案の中に組み込まれたカリキュラムとみなされる。その月あたりの回数はC幼稚園では1名（保育者B-1）を除いて他の6名はすべて1回未満であったのに対し、A幼稚園、B保育所では全員（7名）が月1回ないしはそれ以上折り紙遊びを行っていた（表2）。これは岩瀬・中山（2010）が附属幼稚園で調査した回数と同程度である。質問②に対してC園のC-7が「我が園では、ほとんど折り紙の指導はしません。」と回答しており、C園とA、B園との頻度の違いは園の指導方針によるものといえる。ただし、2歳児を3歳児と一緒に担当していたC-2もクラス全体での折り紙遊びはしていないが、それは折り紙遊びがまだ難しい2歳児がいたためかもしれない。

自由遊びの時間での折り紙遊びの回数については、

表2 折り紙遊びの月頻度

	保育者	折り紙遊びの回数／月	
		クラス全体	自由遊び時間
A 幼稚園	A-1	1～2	0
	A-2	1～2	1
	A-3	3	4
B 保育所	B-1	1	0
	B-2	1	0
	B-3	1	0
	B-4	1.5	0
C 幼稚園	C-1	1	1.2
	C-2	0	1
	C-3	0	1
	C-4	年1回	0
	C-5	0	0
	C-6	0	1
	C-7	年1～2回	年5～6回

クラス全体で月1回以上行うとした保育者の中では、保育者B-3以外はすべてクラス全体で行うより少なく、子どもは自主的にはあまり折り紙遊びをしていないことがうかがわれる。しかし、園として折り紙遊びを保育にとり入れてないC園では自由遊び時間のほうが多かった。

クラス全体で折り紙遊びを月1回以上行うとした8名の保育者（A園、B園、およびC園のC-1）を「折り紙を教材にしている保育者」、それ以外を「折り紙を教材にしていない保育者」と呼ぶことにする。質問②以降については、折り紙を教材にしている保育者の回答を中心に結果をまとめる。

質問②：折り紙遊びの場面

どのような場面で折り紙遊びを行うかについては、具体的な場면을記述した保育者のほとんどが七夕飾りなどの季節行事の飾り物の作成と回答した。また、行事飾りと重複すると考えられるが、折り紙を教材とする保育者8名中3名が「壁面構成を行う時」と回答した。この質問では「壁面構成」や「クラス全体での製作」という回答例を併記したため、それに誘導された可能性は高いが、折り紙遊びは単に遊びとして取り入れているのではなく、目的のある製作行動であることが回答から示されている。

質問③：折り紙遊びをする子どもの姿

この質問も回答例を併記したため、そのいずれかを書いた回答が多かった。回答例は「うまく折れる」、「うまく折れない」、「友達に教える」、「折ろうとしない」の4つあるが、その中で次のような「うまく折れ

ない」に注目した次のような記述が多かった。

- A-1：年少児はまだ上手に折れない子が多い。保育者に「わからない」と伝えられる子もいれば泣いている子、ぐしゃぐしゃにしてしまう子もいる
- A-2：うまく折れなかったり、分からない子がいる
- A-3：苦手な子は「先生どうするの」とすぐに聞く
- B-1：苦手な子どもは、折り紙が少しでもわからなくなるとすぐに諦める
- B-2：分からなくてグチャグチャにしてしまう子もいる
- B-4：折り方がわからなくてもやってみようとする子が多い
- C-4：折り方がわからない
- C-5：細かい折り方は難しい
- C-6, C-7：うまく折れない子が多い

うまく折れる子どもの姿の記述は「指先が器用な子は、きれいに折れる (B-2)」と「基本の形から半分折りは皆上手 (C-5)」の 2 件だけであった。このことから、折り紙遊びは子どもにとって難しい遊びで、うまく折れない子どものほうが強く保育者の印象に残っていると考えられる。うまく折れない子どもは、泣いたり (A-1)、ぐしゃぐしゃにしたり (A-1, B-2)、すぐに諦めたり (B-1) することが、折り紙遊びの指導を一層難しくさせているといえる。その点からも、出来ない子どもへの対応方法が重要であると考えられる。

回答例に挙げた「友達に教える」については次のような記述の回答が見られた。

- A-1：折れたら嬉しそうに見せたり友だちに教えてあげたりする。
- A-2：友達に折り方を教えている子がいる。
- A-3：上手な子が出来ない子を教えている。
- B-1：折り紙が得意な子どもは同じテーブルの友達に教えてあげたりする姿が見られる。
- B-3：友達に折り方を教える姿が年長の子どもたちには、よく見られる。
- B-4：折るのが上手な子に教えてもらったり折ってもらったり、

これらの友達が教える姿の記述は折り紙を教材にしている保育者に限られた。また、これらの記述は回答例

に誘導されたものといえるが、回答例より具体的に内容を記述していることや「よく見られる (B-3)」という表現は、子ども同士の教え合いが頻繁に見られ、保育者の印象に強く残っていることを示すものである。このことから折り紙遊びは、子どもの社会性をより豊かに発達させる遊びであるといえるであろう。

回答例にはなかった子どもの姿として次のような記述があった。

- A-2：角と角を合わせようと頑張っている。意識しようとしている。
- A-3：回数を追うごとにていねいに細かく折れる様になってきた。「出来た」と、折れた喜びを伝えて来る。
- B-3：折り紙あそび初日は、あまり興味がなくても、徐々にやろうとする姿も見られる。
- B-4：折れる子とそうでない子の差が激しい。

保育者 B-4 の記述は折り紙遊びにおける子どもの技量差の大きさをストレートに表現したものであるが、他の 3 人の保育者の記述はいずれも折り紙の技術の向上や折り紙指導が上手くできていることを示唆するものである。

質問④：折り紙遊びの具体的援助

折り紙遊びは初めての子どもにとって難しい遊びであり、それを克服するために保育者はそれぞれ努力していることが回答の中にうかがわれる。援助の仕方は 1) 分かりやすい説明、2) 折り方のコツの説明、3) 手本を示す、4) 励まし、の 4 つに分類できる。それぞれの記述を列挙する。

1) 分かりやすい説明

- A-1：一回一回折り線を付ける様、「アイロンかけましょう」と伝える。折る時、“お山”や“とんがりぼうし”などわかりやすく言う。
- A-2：折り方を説明する時は、前で、ゆっくり説明し、子どもたちが全員しっかり、見ているか確認する。
- A-3：教える時の言葉づかい (三角を合わせる時、お山びったんこ等) を分かりやすく。左右両方ある時は、分からない子に右だけやって、左は自分の力で見せる。
- B-1：複雑な所は何度かわかりやすく説明したり、各テーブルをまわって指導していく

- B-2：始めは、説明しながら折り、2回目は、子どもと一緒に1つ1つ説明しながら、ゆっくりと折り、完成させる。
- 2) 折り方のコツの説明
- A-1：下から上に折る。角と角を合わせる。線と線を合わせる。
- A-2：折る時は、しっかりと折り目をつける様、声をかける（アイロンをあてる）
- 3) 手本を示す。
- A-2：グループごとに説明して見せる。[筆者注：「見せる」という表現が手本を見せることと理解される]
- B-2：はじめは説明しながら折り、2回目は子どもと一緒に1つ1つ説明しながらゆっくりと折り、完成させる。
- B-4：折り方の説明は一度保育士が折って見せ、その後2~3工程ずつ知らせていっている。
- C-1：お手本を見せるときは、しんぶんし等、大きな紙で黒板で手本を見せる。
- C-2：前で見本を見せながら、一緒に折っていく。子どもが2枚作る時は、1枚は自分で作る。
- C-4：大きな紙での見本、留意事項をわかりやすく
- 4) 励まし
- B-3：出来上がりが違うものが出来ても、誉めるようにする。

以上から、保育者が行う具体的援助は、記述の多さから「分かりやすく説明する」こと、「手本を示す」ことの2つが主であった。「分かりやすい説明」とは、「こどもがイメージしやすい言葉を使う」、「ゆっくり説明する」、「何度も説明する」の3つがポイントになっていることが分かる。保育者が手本を示すのは折り紙遊びでは当たり前のことであるが、折り紙を教材にしない保育者（C-2、C-4）がそれを記述しているのに対し、折り紙を教材にしている保育者は半数しかそれを記述していないのは当たり前と認識しているためかもしれない。

質問⑤：援助の留意点

保育者が何を意識して折り紙遊びの指導をしているかを聞いたこの項目は本研究の核心になる質問であるので、未記入だったC-1を除き、折り紙を教材にしている保育者7名の回答の全文を列挙する。

- A-1：折り線をきれいにつける。角と角、線を合わ

せることは大切で基本的なことなので、毎日伝えるようにしている。

- A-2：上手く折れない子には不安がらない様、声をかけ励ますようにしている。友達を手伝ってあげようとする子には、友達の分を全部折ってしまわない様に注意し、出来るだけ保育者が、出来ていない子を先に気付いて、説明するようにしている。
- A-3：分からないで手が止まってしまうことのない様、全体に目を配る。喜びを受け止め、次へとつなげられるようにする。一人ひとりにわかりやすく折り方を伝え、説明（話）をしっかり聞くよう促す。
- B-1：折り紙が苦手な子どもはすぐに諦めてしまう子。
- B-2：子どもが分かりやすいように説明する。半分に折る時など「こんにちは」と折る等、難しかったり、注意する所は、繰り返しゆっくりと伝える。
- B-3：間違えたものはなく自分で出来たものを必ず一人一人誉めるようにする。
- B-4：特に製作が苦手な子はテーブルにかためている（指導しやすいように）。出来る子とそうでない子の差があるので難易度は中間ぐらいのものがほとんど。出来る子はパパッと折ってあきてしまうのでなるべく時間をかけず進めていき、苦手な子は個別に指導している。

前項の質問④と同様、分かりやすい説明（B-2）、折り方のコツ（A-1）、励まし（A-2、A-3、B-3）を挙げた保育者が多くいたが、全体への目配り（A-3）、出来具合のバランス（A-2）、出来る子を飽きさせない配慮（B-4）など、質問④とは異なった回答が見られた。B-1の回答（すぐに諦めてしまう子）は、質問の意味を誤解した可能性があるが、折り紙遊びの時は出来ない子どもが一番気がかりということかもしれない。最も注目すべき回答はB-4の「特に製作が苦手な子はテーブルにかためている（指導しやすいように）」という記述である。折り紙遊びの指導の難しさは、折り紙に対する子どもの技量差が著しく、出来る子どもはすぐに飽きてしまい、出来ない子どもはすぐに諦めてしまうことにあるとされるが、同程度の能力レベルでグループを作って遊ぶことで子どもの関心や意欲をより長続きさせることができるであろう。折り紙遊びの指導を成功させる秘訣かもしれない。

なお、折り紙を全体での教材にせず自由遊びで取り入れている保育者の中に「全体でついていけない子を把握し、後で1対1でゆっくり指導していきます (C-2)」という回答があった。この方法は、保育者にとっては時間をとられることになるが、全体での遊びで出来ない子どもへの個別的な援助として有効であろう。

質問⑥：うまく折れない子どもへの対応

うまく折れない子どもに対する対応では、折り紙を教材にしない保育者も含めてほぼ全員が「となりで一緒に作る」または「手を添えて作る」といった内容の回答をした。ただし、折り紙を教材にしない保育者には「私は手を加えず、もう一度見本を見せる (C-4)」や「援助はできるだけしない (C-5)」といった、できるだけ自分で折らせようとする回答もあった。

それ以外の対応としては「折れた後は、しっかり褒めて、自信をつけさせる (A-2)」, 「不安を感じない様「先生が行くから大丈夫」と安心させる (A-3)」という心理的援助もあった。

質問⑦：援助後の子どもの変化

出来ない子どもに援助した後の変化については、14名すべての保育者が援助の成果を記述した。とくに「嬉しそうに「できた」と発言 (A-1)」, 「仕上げた作品を手にして、他の子ども達と同様に満足感を得た (A-2)」, 「自分で折ったという達成感がある (B-2)」など、子どもの達成感や喜びの感情を記述した内容が多かった。また、「分からないままにしないで自ら聞くようになった (A-3)」, 「自信につながる (B-1)」, 「折れたことが嬉しくて、お家で折り、上手くなる子もいる (B-2)」, 「折れる楽しみを知り、間違えていても何回も折ろうとする姿がみられた (B-3)」, 「自分でしようとするようになる (C-3)」といったように、喜びの感情だけでなく折り紙遊びに対する子どもの気持や意欲の変化を表した記述もあった。

こうした記述は、折り紙が出来なかった子どもでも保育者の援助によって必ず出来るようになること、また、子どもの発達に及ぼす意義から考えれば、折り紙遊びは出来る子どもよりも出来なかった子どもに対して良い効果が期待できることを示している。その意味からは、折り紙遊びにおける子どもの技量差は、保育の上で障害になるものではなく、むしろ出来なかった子どもの発達を援助し、強い達成感を体験させる格好の機会であると捉えるべきではないだろうか。

質問⑧：折り紙遊びを保育に取り入れることについての考え

保育における折り紙遊びについての考えとして、無回答の2名 (B-1, B-2) を除き、他の12名はそれぞれ折り紙の意義または利点について回答している。具体的には、日本の伝統文化の継承 (A-2, A-3, C-2, C-3, C-4)、手先の器用さの発達 (A-1, A-2, A-3, B-4, C-1, C-3, C-6)、集中力をつける (A-1, C-3, C-5) などである。

折り紙遊びに対して否定的な考えを示したのは、折り紙を教材にしていない保育者 C-2 と C-6 で、それぞれ「折り紙は決まった折り方、完成品なので、個性があまり出ないので、設定保育では殆ど取り入れておりません」, 「感性を高める為にも色彩的にも、出来上がりの同じものを皆と作ることは、効果的とは思わない」と記述している。これらの記述は、回答の中の一部を抽出したもので、両保育者が折り紙遊びの意義を全面的に否定したものではないことは先に断っておきたい。実際、C-2 は「日本の伝統の遊びでありますので、自由遊び等で行い、伝えていく事は大切」と述べ、C-6 は「個性の出る製作を、色を考えて準備し、その中で自由に作っていくことの方が、効果的で、考えるという事においても良いと考えます。取り入れ方を考えると、保育のセンスが光るかな?」と折り紙遊びの工夫を提案している。

手本に従った伝承折り紙には創造性や個性はない、という意見は間違いではない。しかし、保育教材としての折り紙の意義は、完成に向かって手本通りに折る過程において子どもの身体的、精神的発達を促すことにあり、創造性や個性がないという理由で折り紙の教材としての価値が下がるわけではない。さらに、手本通りの折り紙でも、作品に色を塗って装飾したり、色紙を選んで折った作品を組み合わせ壁面を飾ったりすることによって、作品に個性を持たせることが可能である。五十嵐 (2012) は、折り紙を「折る子どもの発達に見合った援助により、創造性や想像力、造形感覚、色彩感覚を刺激し、自立性、思考力、社会性や生活態度等を育てる援助の仕方を工夫することができる教材である」と述べている。さらには、折り紙が上手く出来るようになると、折り方の手加減によって自分の完成品のイメージに合わせて作ることも可能である。その意味から、東 (2004) は、折り紙遊びは自由な表現活動と形に合わせての表現活動の両面をうまく合わせそなえた遊びであるとしている。手本通りの折り紙遊びを重ね、折り方が上手くなれば、保育者 C-6 が

期待するような子どもの発想で「自由に作っていく」創作折り紙的な遊びも出来るようになるのではないだろうか。ただし、創造性や個性を発揮させる遊びや創作活動は、例えば積み木遊びや泥んこ遊びなどたくさんあるので、折り紙にまでそれを求める必要はないであろう。むしろ、折り紙はそれとは違う意義を活かす遊びとして取り入れ、教材の意義を多様にするほうが重要であると考えられる。

IV. まとめと今後の課題

本研究では、指導が難しいとされる折り紙遊びにおいて保育者がどのような指導を行なっているかを明らかにするために、とくに指導の難しさの要因になる折り紙ができない子どもへの指導に注目して、3園14名の保育者にアンケート調査を行なった。月1回以上クラス全体で折り紙遊びの取り入れていると回答した保育者は7名で、他の7名は自由時間にした自由遊び時間にしか折り紙をしていなかった。折り紙遊びをする場面は、主に月行事の壁面構成や飾りであった。折り紙遊びの子どもの様子としては、上手く折れない子どもと折れない友達に教える子どもの姿がアンケートの回答に目立った。回答にあった折り紙遊びの指導の方法をまとめると、子どもが理解しやすい言葉を使って、ゆっくり何度も分かりやすく、手本を示し、折り方のコツを説明することである。技術的な指導だけでなく、子どもの意欲を高めるために出来ても出来なくても褒める励ましも必要である。折り紙遊びの指導で保育者が留意している点は、具体的な指導を聞いた質問の回答と同じ内容が多かったが、本研究の課題である出来る子どもと出来ない子どもがいるための難しさに対応としては、指導しやすいように苦手な子どもを同じテーブルに集めるという回答（保育者B-4）があった。この指導方法は他の保育者の回答にはなく、子どもの技量差のために指導の困難さを減少させるためには非常に有効な方法と考えられる。折り紙が出来ない子どもに対する指導方法としては、保育者がそばに付いて一緒に折るのが共通した回答であった。保育における折り紙遊びについての考えを聞いた最後の質問では、回答したほぼ全員が折り紙遊びの意義を述べた。しかし、手本を使った折り紙は個性がないという指摘もあった。

保育所・幼稚園での折り紙遊びの指導に関する以上の結果の多くは、岩瀬・中山（2010）、長根（2006）、大森（2011）などの研究で推奨されてきた指導方法と

変わりはなく、実際にそうした指導を行なっていることが本研究の調査での折り紙を教材にしている保育者によって裏付けられたといえよう。本研究で新しく推奨される指導方法は、折り紙が苦手な子どもを同じテーブルに集めて指導することである。それによって、技量差がある子どもがいるクラスの指導が難しいとされる折り紙遊びが指導しやすくなるはずであり、折り紙遊びが保育にもっと活用されることが期待される。

子どもの発達を促す折り紙の有用性を考えるなら、保育において折り紙遊びは季節行事だけでなく、もっと頻繁に行うべきであろう。しかし、そのためには保育者自身が多くの種類の折り紙を上手に折れることが前提になる。五十嵐（2012）が指摘するように、養成校や園内研修などで学ぶことが望まれるが、その際、折り方の指導ではなく子どもの技量に差があることを考慮した指導の方法についての学びが必要であろう。そうした学びについての研究が今後の課題であると考えられる。

謝辞

本研究の目的をご理解いただき、ご多忙の中でアンケートにご協力いただいた保育者の方々に心から御礼申し上げます。

引用文献

- 亀丸武臣・丹羽孝・勅使千鶴 2007 日本における伝承遊び実施状況と保育者の認識. 名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究 7. 56-78
- 東洋 2004 幼児の精神発達について. 母と子の会話 ことばは折り紙 日本評論社. 7-32
- 福井晴子 2003 折り紙遊びの歴史的側面と幼児教育における現代的意味. 保育学研究 36. 41-43
- 五十嵐裕子 2012 折り紙の歴史と保育教材としての折り紙に関する一考察. 浦和論叢 46. 45-68
- 岩瀬敏子・中山千章 2010 折り紙と幼児教育-附属幼稚園の指導をとおして. つくば国際短期大学紀要 38. 17-27
- 梶田正巳 2014 “折り紙”文化の潜在力と可能性(最終回) 折り紙~教育への提言~. 児童心理金子書房 2014年4月号. 501-507
- 長根利紀子 2006 保育実践における子どもの発達と保育者の能力についての一考察-折り紙「柿」を通して-. 名古屋柳城短期大学研究紀要 28. 107-124
- 梨本竜子 2015 保育者養成における「折り紙」指導の必要性についての一考察-実習時における経験に関する学生アンケート調査を基にして-. 新潟青陵大学短期大学部研究報告 45. 85-93
- 大森隆子 2011 遊戯折り紙研究考(3)-遊戯折り紙の指導法について-. 椋山女学園大学教育学部紀要 4. 13-21
- 田中陽子・後藤千鶴子 1989 保育者養成における折り紙指導の体系化(Ⅱ)《幼児の実態調査と基本形との関係》. 日本保育学会大会研究論文集 42. 160-161